2023 年 3 月 26 日
宮崎中部教会主日礼拝
牧師　乾元美

申命記 4：20
エフェソの信徒への手紙 1：3～4
「教会とは」
（ハイデルベルク信仰問答　問 54）※問答は「日々の祈り」をご覧ください。

【前奏】【招詞】詩編 100：1～3
【祈祷】
【聖書】申命記 4：20、エフェソの信徒への手紙 1：3～4
【説教】「教会とは」
＜教会＞
　わたしたちは、今、教会に集って、神さまに礼拝をささげています。教会。しかし教会とは、一体何でしょうか。
　今日のハイデルベルク信仰問答は、信仰の箇条である「使徒信条」の中の、「我は聖霊を信ず」という告白に続く、「聖なる公同の教会」を信じる、という告白についての問答です。
　「聖なる公同の教会」を信じる。この、教会を信じる信仰は、「聖霊」の項目の中に含まれています。つまり、教会の歩みは、聖霊のお働きが深く関わっている、ということを覚えておく必要があります。

　ところで、皆さんはどうして「教会」に来られるようになったのでしょうか。
　皆さんが教会に通い始めたきっかけは、本当にそれぞれ違うと思います。家族がクリスチャンだったから。知り合いに誘われたから。行ってみたかったから。救いを求めて。聖書を知りたかったから。それぞれの心の思いや、理由があったに違いありません。

　でも、わたしたちが教会に集うことになったのは、神さまの招きによるものです。さまざまな出来事を通して、さまざまな心の思いを通して、神さまがここにいる一人一人を選び、名前を呼び、御許へと招いて下さったのです。
　わたしたちの信仰の歩みは、いつも神さまが主導して下さいます。教会は、まず神さまのわたしたちを救おう、というご意志があって、そのために神さまが集めて下さり、救って下さった者たちの群れなのです。

　ですから、教会は、決して、人間によって、集まりたい人が集まって作った集団なのではありません。また、建物や場所が、教会なのでもありません。
　教会は、ギリシア語では「エクレーシア」と言います。これは、「招集された群れ」「召し集められた者の群れ」という意味です。神さまに集められた群れ。集められたわたしたちの群れそのものが、教会なのです。

＜選ばれた一つの群れ＞

今日のハイデルベルク信仰問答の問 54 には、このようにありました。「『聖なる公同の教会』について、あなたは何を信じていますか。」「答　神の御子が、全人類の中から、御自身のために永遠の命へと選ばれた一つの群れ」であると。

聖なる公同の教会とは、神の御子が、全人類の中から、御自身のために永遠の命へと選ばれた一つの群れである。神の御子が、神のご意志によって、永遠の命へ。つまり、永遠なる神さまと共に生きることへと、全人類の中から、わたしたちを選んで、その恵みに与らせて下さった。その選ばれた一つの群れが、教会なのです。

ここに、「選び」という言葉が出てきます。神さまが、わたしを選んで、救いに与らせて下さった。わたしを選んで、教会に招いて下さった。わたしは、神さまに選ばれたから、救われた、ということです。

この「選び」の教理は、よく「それでは選ばれない人はどうなるのか」という疑問を呼び起こします。しかし、わたしたちは、誰が救いに選ばれていて、誰が選ばれていないのか、他の人の選びや、救いについて語ることは、一切出来ません。それは、ただ神さまだけが、お決めになることだからです。

むしろ「選び」という時、それは、神さまに救われたことを知った者が、自分自身の救いのことを語る時に使う言葉です。

つまり、罪人である自分には、救われる理由が何もない。良いことをしたわけでもない。神さまに喜ばれる者だったわけでもない。他の人より優れた者だったわけでもない。自分を見つめても、救われた理由が分からない、ということです。

自分の側に、神さまに救われる理由や条件がないのです。わたしは、ただ罪人であり、神さまに背き、逆らい、神さまを怒らせ、悲しませる者でしかありませんでした。

しかし、それにも関わらず、イエスさまの十字架による罪の贖いによって、わたしは自分の罪が赦されたことを知った。そして神さまが、御自分の子どもとして、わたしを受け入れて下さったことを知った。永遠の命を受け取った。復活の約束を受け取ったのです。

それは、なぜか。それはただ、神さまがわたしを救うことを決めて下さったから。神さまがそうしたいと願って下さり、わたしを選んで、救いに入れると決心して下さり、それを実現して下さったから。そうとしか答えられない、ということなのです。

自分には何の救われる理由もない。ただ、神さまが、わたしを救おうと思って下さったから、救われた。神さまの方に、わたしの救いの理由がある。根拠がある。

神さまが、わたしを救いに選んで下さった、というのは、そうとしか、自分が救われた理由が説明出来ない、ということなのです。

今日読まれたエフェソの信徒への手紙１：4～5 にはこうありました。
「天地創造の前に、神はわたしたちを愛して、御自分の前で聖なる者、汚れのない者にしようと、キリストにおいてお選びになりました。イエス・キリストによって神の子にしようと、御心のままに前もってお定めになったのです。」

神さまがわたしたちをお選びになったのは、「神はわたしたちを愛して」とある通り、愛のゆえです。しかも、天地創造の前に。この世が造られる前、わたしたちが造られる前から、神さまはわたしたちを「神の子」にしようと、御心のままに、前もってお定めになっていた、と言います。
天地の造り主が、造られた者を、わたしたちを、ご自分の愛する子どもとして受け入れ、取り扱おうと、世界が始まる前から、心に定めておられた。わたしのことを、そう定めて下さっていた、というのです。

しかも、5 節には「心のままに前もってお定めになったのです」とあります。この「心のままに」という言葉は、喜びの意志をもって、と訳すことも出来る言葉です。
神さまは、このことを、喜びをもってして下さる。わたしたちを神の子として愛することが、神さまの喜びである。望みである。
このような神さまの心によって、わたしたちは選ばれているのです。だから、わたしたちが罪を犯しても、離れても、神さまは愛によって、その御心を、その定めを、必ず実現して下さるのです。そのためになら、神さまは全能の力を尽くして、御子がその命をささげることまでして、わたしたちを罪から救い出して下さるのです。
そうして神さまが、ただ恵みによって、心から望んで下さって、わたしを選び、わたしを救って下さった。永遠の命へ。つまり、永遠なる神さまと共に生きる命へと、選んで下さった。その、選ばれた人々が一つに集められた群れが、教会なのです。

＜聖なる＞
ですから、信仰告白は教会のことを、「聖なる公同の教会」、「聖なる」教会と告白していますが、「聖なる教会」とは、集っている者たちが立派な、優れた、清らかな人々である、ということではもちろんありません。
教会は、聖人君子の集まりじゃない。むしろ、神さまに選ばれるのでなければ、救いに与ることが出来なかった、罪人たちの群れです。しかし、神さまに選んでいただき、イエスさまに救われた、神の子とされた者たちの群れなのです。

「聖なる」という言葉の聖書的な意味は、「清く正しい」というのではなく、神さまのものとされるために特別に取り分けられたもの、という意味です。つまり、聖なるもの、とは、神さまのもの、と言ってもよいのです。聖なる教会。それは、まことに聖なる方である神さまのものとされた、一つの群れ、ということなのです。

神さまのものとされるには、汚れのない、清いものでなければなりません。しかし、わたしたちは罪に汚れ、どうしようもない状態でした。
それを、神の御子が、御自分の血によって、わたしたちの罪を贖い、罪の汚れを洗い清め、わたしたちを聖なるもの、神のものとして下さったのです。
このイエスさまにおいてこそ、教会は「聖なる」教会なのであり、また神の御子イエスさまご自身のものであり、神さまのものであるのです。

＜ご自分の御霊と御言葉によって／公同の教会＞
また、教会が「聖なる」もの、神さまのもの、イエスさまのものである、というのは。問54の答えにあったように、イエスさまが、「御自分の御霊（つまり聖霊）と御言葉とにより、まことの信仰の一致において、世の初めから終わりまで集め、守り、保たれる」からです。イエスさまが、聖霊と御言葉とによって、働いて下さるところだからです。
イエスさまの教会は、聖霊のお働きによって、神さまの御言葉が語られ、イエスさまの救いが告げ知らされ、その恵みが受け取られる場所です。
そうして、一人の罪人が、教会へ招かれ、信仰が与えられ、救われ、イエスさまに結ばれていきます。一つの群れに、選ばれた者が集められ、加えられていきます。
そのようにして、イエスさまを頭とするイエスさまの体なる教会は、成長していくのです。

さて、ハイデルベルク信仰問答は、ずっと教会のことを「一つの群れ」と呼んでいます。
目に見える教会は、この地上の各地に沢山あります。大きな群れ、小さな群れがあり、また教派の違いや、言葉の違いもあり、先の時代にもあり、今もあり、後の時代にもあるでしょう。
しかし、これらの教会は、聖霊のお働きによって、「まことの信仰」を与えられることによって、お一人の救い主イエスさまに結ばれることによって、同じ一つの教会です。
聖霊によって、御言葉が語られ、同じイエスさまを信じ、同じ「まことの信仰」に与り、同じ洗礼を受けたのなら。それはどこにあっても、世の初めから終わりまで、いつの時代にあっても、同じ信仰。同じ教会。同じイエスさまにある「選ばれた一つの群れ」なのです。

これを、使徒信条は「公同の教会」と言っています。「公同」とは、カトリック、という言葉です。これは、一つのローマ・カトリック教会という教派のことではなくて、「普遍的な」という意味、「普遍的教会」ということです。
あまねく同じ教会。世界のどこにある教会でも、いつの時代の教会でも、聖霊によって語られる御言葉により、「まことの信仰」に生きるならば、お一人のイエスさまを頭とする、お一人のイエスさまの体に結ばれた同じ一つ群れ、同じ一つの教会なのです。

それはつまり、この 2023 年、宮崎の地の、この小さな教会に属しているわたしたちも、「まことの信仰」にあって、空間も、時代も超えて存在している「公同の教会」「普遍的教会」の一部分だ、ということです。お一人のイエスさまの体の一部だ、ということです。

場所や、時代や、言葉が違っても、聖霊によって、同じ御言葉・福音を聞き、同じイエスさまの救いを信じ、同じイエスさまに結ばれ、同じ聖霊を受け、同じ父なる神さまの子どもとされた。ここにいるわたしたちも、その、大きな一つの群れの、一部なのです。

＜永遠に群れの部分であり続ける「わたし」＞

さて、ここでは常に「一つの群れ」として教会のことが語られています。

信仰は、救いは、確かに、一人一人に与えられるものに違いありません。しかしそれは、教会において。群れにおいて。イエスさまが、聖霊と御言葉によって、集め、守り、保たれるところにおいて、選びがあり、招きがあり、一人一人に救いの出来事が起こるのです。

わたしたちは、この選ばれた一つの群れの中にあってこそ、その群れの一人として、神さまに選ばれていることを知ることが出来ます。

ですから、ハイデルベルク信仰問答は、教会のことを語っている問 54 ところで、最後に、個人の「わたし」についても述べています。「そしてまた、わたしがその群れの生きた部分であり、永遠にそうあり続ける、ということです。」

「わたしがその群れの生きた部分である。」わたしは、一人一人は、「神の御子が、全人類の中から選ばれた一つの群れ」の生きた部分であり、一員です。

まず、一人の人が信仰を与えられ、洗礼を受けると、その見える一つの具体的な教会の群れの一員となります。

しかしまた、この教会は、公同の教会、場所も時代も超えた普遍的な教会の一部分でありますから、救われた一人の「わたし」もまた、見える具体的な教会に繋がることによって、この空間も時代も超えている、公同の教会にも繋がるのです。

一人一人が、イエスさまを頭とする体の一部。神の民の一員。歴史と空間を超えた、まことの信仰にあって一つなる教会の、一員です。

そうして、わたしたち一人一人もまた、イエスさまの体を築くものとして、教会を造りあげるものとして、その体の生きた部分として、置かれる。いやむしろ、イエスさまの永遠の命と結ばれることで、イエスさまの命がわたしに通って、その体の一部分として、生かされていくのです。

そして、「永遠にそうあり続ける」。そう、ハイデルベルク信仰問答は語ります。

しかし、わたしたち一人一人が、教会の群れの生きた部分として、永遠にそうあり続けるのは、イエスさまに繋がり続けるのは、わたしたちが頑張って、そうあり続けようとすることによってではありません。

前回の問 53 で、聖霊は、わたしに与えられたお方であり（つまり、わたしに宿って下さる神であり）、まことの信仰によって、キリストとそのすべての恵みにわたしをあずからせ、わたしを慰め、永遠にわたしと共にいて下さる、と語られていました。

この永遠に共にいて下さる聖霊によって、わたしたちはイエスさまの命に永遠に結ばれ、イエスさまの救いの恵みに、永遠にあずかり続けるのです。

地上を歩むわたしたちは、罪を赦された者でありながら、なお罪を繰り返し、弱さを持ち、間違いを繰り返しながら歩んでいます。わたしたちは、そんな自分の弱さばかりを見つめて、何かあれば自分は信仰を失ってしまうのではないか。最後まで教会に繋がり続けることは出来ないのではないか。そんな不安を覚えたり、考えたりすることもあるかも知れません。

しかし、教会はイエスさまのものであり、そこへ、わたしたちを選び、招き、結び付けて下さったのは、神さまご自身です。教会を、わたしたちの群れを、まことの信仰によって建て上げて、成長させ、築いて下さるのは、聖霊と御言葉によって、教会において働き、支配して下さるイエスさまご自身です。
イエスさまが、ご自分の体なる教会を、御自分が集められた群れを、その御自分の御手によって守り、世の終わりから最後まで、恵みの中に保っていて下さるのです。

わたしたちは、そのようにして、教会の頭なるイエスさまによって、永遠に共にいて下さる聖霊によって、群れの生きた部分として、永遠にそうあり続けるのです。永遠の命を生きておられるイエスさまと共にあることで。この方と結ばれることで。わたしもまた、今この時から、イエスさまの体の部分として、永遠の命を生き始めているのです。そして、永遠に至るのです。
イエスさまが責任をもって、初めから終わりまで、わたしたちを恵みの内に保っていて下さいます。世の何ものも、死でさえ、わたしたちを、この方から引き離すことは出来ません。
そして、それはまさに、神さまご自身が、わたしたちを愛し、望み、喜んで御心として下さったことなのです。
神さまの愛は、わたしたちを決して離さないと言って下さる。その力強い御手が、永遠にわたしを捕らえていて下さる。わたしたちは、聖なる公同の教会にあって、選ばれた一つの群れの生きた部分として、そう確信していてよいのです。

＜神をほめたたえるため＞
では、主の体に結ばれた、その部分とされたわたしたちは、何をすればよいのでしょうか。
それは、神さまをほめたたえることです。神さまを礼拝することです。それこそ、わたしたちの造られた目的であり、わたしたちの最高の喜びです。
神さまの喜びにあって示されるご意志と、その御業を、喜びをもって受け入れる。神さまと共に喜んで生きる。それが、まことの信仰に生き、イエスさまが集め、守り、保って下さる、教会の姿です。

そして、そのように、わたしたちが選ばれ、イエスさまのものとされて、喜んで歩む、この教会という共同体にこそ、ハイデルベルク信仰問答の問１が語っていた慰めがあります。

「生きるにも死ぬにも、あなたのただ一つの慰めは何ですか。」
「わたしがわたし自身のものではなく、体も魂も、生きるにも死ぬにも、わたしの真実な救い主、イエス・キリストのものであるということです。」

「聖なる公同の教会」を信じる、とは。わたしたちが、イエスさまに集められ、守られ、保たれる、選ばれた一つの群れであり、わたしがその部分として、永遠にキリストのものである、と信じてよい、ということです。
教会とは、わたしが、体も魂も、生きるにも死ぬにも、わたしを罪から救い出して下さったキリストのものである、というこのまことの慰めが、聖霊によって与えられ、現実のものとして実現し、わたしがその恵みに、具体的にあずかって生きていくところなのです。
教会とは、わたしたちとは、そのような慰めに、共に、永遠に生かされていく、選ばれた一つの群れであり、慰めの共同体なのです。

【お祈り】
天の父なる神さま
あなたの愛によって、喜びのご意志の内に、わたしたちを神の子として受け入れると定めて下さったこと。その恵みに、わたしたちを選んで下さったことを、心から感謝いたします。
わたしたちがイエスさまの罪の贖いによって、罪から救われ、聖霊によって、イエスさまと結び合わされ、「まことの信仰」の一致にある、選ばれた一つの群れに加えられていることを、心から感謝いたします。
イエスさまご自身が、この群れを「まことの信仰」において一致させ、世の初めから終わりまで、集め、守り、保って下さいます。ですから、どうかわたしたちは、この生きた一部とされていることを心から感謝し、イエスさまのものとされている、大いなる喜び、たった一つの慰めに、共に与っている共同体として、あなたを声高らかに賛美し、礼拝しつつ、終わりの日まで歩んでいくことが出来ますように。
そしてこの群れに、一人でも多くのあなたに選ばれた者が、そのお招きに応えることが出来ますように。喜びのうちに、イエスさまの体なる教会に連なり、イエスさまのものとされて、まことの慰めに生きることが出来ますように。
このお祈りを、イエスさまの御名によって祈ります。アーメン

【讃美歌】３４６「来たれ聖霊よ」
【信仰告白】使徒信条
【献金】
【主の祈り】
【讃美歌】２８「み栄あれや」
【祝福】主があなたを祝福し、あなたを守られるように。
主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。
主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。
主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、
あなたがた一同と共にあるように。アーメン